

1992年末～93年始 太平天国の故地を訪ねて



上の画像は、どちらも、珠江から見た広州のまちです。私たちが乗ったのは、右の画像の手前のような船

まず、今回の旅行の日程と宿泊地をあげます。
12月25～27日 広州
28、29日 広州～梧州・桂平、船中泊
30日 桂平
31日 柳州

1月1、2日	柳州～杭州、車中泊
3、4日	杭州
5日	広州
6日	深圳（しんせん）

【初めまして王さん!】

広州空港の海関（税関）を出ると、“橘さん”と大きく書いた紙がすぐに目についた。王さんだ！「初次見面、請多関照」（はじめまして、よろしくお願いします）、握手しながらこう言おう。いや、抱き合った方がいいかな、など随分心準備をして来たが、王さんの方から先に「よくいらっしやいました、王志勤です」と日本語で挨拶されると私も釣られて「はじめまして橘です」と日本語で言ってそれで終わりになってしまった。王さんは、2年間の日本留学の経験があるだけに日本語が上手だ。12月25日19時、広州空港での王さんとの対面はあっけなく終わり、私の中国旅行は始まった。

翌朝、6時50分、約束の時間ピッタリ、東海漁村に泊まった王さんが梅花村酒店へ私を迎えにきてくださる。「大きな雨が降ってます。3ヵ月ぶりの雨だそうです」王さんの傘からは、まだしずくが落ちている。今日は花県の官禄bu(土偏に布)村へ行く日なのにまずいなあ、と思いながら荷物の中からレインシューズを出す。荷物は必要な物だけを小さなリュックに入れ背負う。タクシーの中から見る広州の町は活気がある。雨のなか、自転車での通勤風景はその数の多さが壮観だ。白、黄、水色、ピンク、色とりどりの合羽がきれいだ。中国の合羽は自転車ごとすっぽり被る。写真を撮りたいがカメラがない。香港でのカメラ盗難というトラブルは、思い出しても腹が立ち、また情けない。

【広州のデパートでカメラを買う】

広州港近く、珠江沿いのレストランに入る。珠江にはたくさんの船が停泊している。「あさって乗る船はあれぐらいですかねえ」「いや、400人乗りということだからもっと大きいのでは」などと話しながら朝食を摂る。広州には飲茶という習慣がある。朝は早茶、昼は下午茶、夜は夜茶といって家族で、あるいは気の合った者同士、あるいは商談しながら時間をかけてゆっくりと食事をする。今もこのレストランのいくつかのテーブルはそういう人たちで占められている。しかし、私たちの今日の予定は忙しい、なんといってもカメラを買わないことには仕事にならないので、広州一のデパート南方大厦へ行く。九時開店を少し待って入る。入り口の両側に店員が並んで挨拶し客を迎え入れる。「日本に倣ってこういうサービスをするようになったのです」と王さんの説明。日本製のコンパクトカメラを625元（約1万4千円）で買う。



雨の日の自転車通勤風景

【官禄布(以下、「布」で代用 かんろっぶ)村】

広州から1時間、私たちの乗った中巴（マイクロバス）は、花県を中心、新華に着いた。ここから先は路線バスはない。オート三輪のタクシーを見つける。運転手との交渉の結果、片道10キロの官禄布村往復が、向こうでの待ち時間も入れて30元（約680円）でまとまる。幌付きの荷台で揺られること20分、広東省花県官禄布村に着く。ここに、太平天国最高指導者洪秀全の故居がある。

小島晋治氏の著書によると、秀全の6代前の祖先が広東省梅県嘉应州から移住してきたのが花県の洪氏のはじめであり、官禄布村の起源である。ところで、広東省梅県嘉应州は客家（はっか）の集住地として有名であり、洪秀全が客家だということもまたよく知られている。



官禄布村入口



洪秀全故居の標識



洪秀全故居(解放後に復原) 左は王さん



洪秀全故居内部



村塾 左端、私たちが乗ってきた三輪タクシー



村塾内部

【 広州－(泊)→梧州－(泊)→桂平 二泊三日の船旅 】

広州～桂平は、途中、梧州で乗り換え、二泊三日の船旅である。

広州、12時45分出航。梧州まで342キロ18時間。この船には、二人個室の3A、4人個室の3B、蚕棚のような3等、折りたたみ寝椅子の4等、の四種類がある。私たちは3Aで、料金は二人で56元（約千三百円）、大変狭い二段ベッドで、寝ごさが敷いてあって小さな布団が付いている。「あっ、ゴキブリ！」小さなゴキブリが三、四匹走り回っている。私は、ちょっと汚いこの個室、汗のしみ込んだ寝ごさと布団からしてゴキブリもしかたないとすぐ諦めたが、王さんはスリッパでみんな殺してしまった。

「ゴキブリは中国語で何というのですか？」「チャンランと言います」「どう書くのですか？」
「蟑螂です」

梧州は大きなまちである。桂林を流れている漓江はこの梧州で西江に流れ込む。

昨夜の船での寝違いで、王さん首が回らない。相当痛そう。床屋を見つけてマッサージを頼む。6元（約140円）取られたが、あまり効果はなかったよう。タクシーに乗っても、「ドアにもたれたいから右の席」と乗る側を指定するほどの痛がりよう。

昼食後はついにダウン。王さんは歌舞庁（ダンスホール。いたるところで見かけた）のソファで休養。私一人の梧州見物となった。



上の画像 ■ 広州→梧州、梧州→桂平どちらもこんな船

右の画像 ■ 3等のベッド



王さん、船での寝違いで首が回らない



上の画像 ■ 梧州は蛇の産地。港に近い市場で。

右の画像 ■ 梧州港の風景。矢印は私たちが乗った船。



【梧州の食材、蛇】

昨夜の船での寝違いで、王さん首が回らない。床屋を見つけてマッサージをして貰ったが、あまり効果はなかったよう。昼食後はついにダウン。歌舞庁(ダンスホール)のソファアで休養。私一人の梧州見物となった。

王さんに、昼間一人で港近くの大きな市場を見学したときの話をする。一番印象に残っていた蛇の話をする。(前ページの画像)

「蛇を売っている店がたくさんありました」

「広東、広西の人は蛇が大好きです」

「五歩蛇というのは、噛まれると五歩も歩かないうちに死んでしまうほど毒が強いから、そういう名が付いているのですねえ」

「そうです。特に毒が強いのは五歩蛇と金環蛇です。五歩蛇は山にいます。金環蛇は鼠を食べるのて家の近くにいます。蛇は目が見えないが、赤外線を感じて襲います。これらに噛まれると、すぐ

に噛まれたところの肉を山刀で削ぎ取るしか方法がありません」

「王さんは、蛇のこと、なかなか詳しいですねえ」
「私は、大学を卒業した一九六三年の九月から五年の二月まで、『同吃同睡同労働』のスローガンのもと、紹興の農村に入りました。豚小屋の隣の部屋で、年老いた農夫と隣り合わせのベッドで寝起きしました。その村には蛇がたくさんいました」
(次ページに続く)

社会科教師の見た

華南世情

>2<

さわやかな日和。船で梧州へ行く日だ。珠江の上流西江を梧州から三百四十二キロ、十八時間遡(さかのぼる。西江の水運は大変盛んだ。砂を下流に運ぶ船が一艘多い。そのほかバナナを満載した船、竹で作った籠(かご)を積んだ船、石炭を積んだ船、いろんな船が行き交う。竹の筏(いかだ)も下ってくる。所々に「加油」と大きく書いた

の立て看板をよく見た。自由市場で売られている食生活を支える豚。梧州市内で聞もなく、ある月刊誌を見ていて、ハツとした。日本の大学で講師を長く務めるイタリア人のMさんが日本の印象を書いている。その中に「どこへ行ってもゴミだらけ、砂浜は缶詰の洪水が毎年一、二度ありま

請勿乱丟紙屑

マナーの悪さ日本同様

って、できるだけ外の景色を見て過ごした。ところがこのデッキに立っているのが、なかなか大変なのだ。上の客室からバナナの皮、みかんの皮、パンの袋、発泡スチロールの弁当箱、たまたまスローガンや「請勿乱丟果皮、紙屑。勿乱吐痰。違者処以二百元罰款」という警告



長い旅で心の休まるひと時だった。(文・写真 明石城西高 教諭 橋雄三)

【王さんとの話(続)】

王さんとの話の続きです。

「たしか、「下放」と言いましたねえ」

「そうです。六六年に結婚しましたが、結婚してから半年ずつが二度ありました。その時も私は農村でしたが妻は工場でした。夫婦別居です」

「文化大革命の時代ですねえ」

「この時代、「五七幹校」(ウーチカンシャオ)

というものがよく言われました。

「この頃、ご主人お見かけしませんか?」

「五七幹校」です」

といった具合です。

「毛沢東が六六年の五月七日に出した指示、つ

まり、知識人の労働化、勤労人民の知識化を促進し、新しい共産主義的人間を育成しよう、という指示のことです。「幹校」とは幹部の学校という意味です」

上弦の薄い月が出ているだけの闇の西江を静に船は進む。

社会科教師の見た

華南世情

>3<

電腦彩板、電腦算命、電腦店の卵売り、備設は交渉次第

の町まで「電腦(コンピューター)天はやりである。

電腦彩板、これはカラー現像・焼き付け・引き伸ばし、この二人の仲をし。電腦算命、これはコンピューター占い。電腦儲蓄、これはキャッシュカードが使用できる貯金というほど

の意味。「電腦紅娘、これの代名詞です。電腦紅娘と

「中国では紅娘(ホンニ

「こんな話を聞いたことがあります。中国では、満員バスでよくスリにあう。そこで、大学職員のパッスを付けておく被害に合わない」

コンピューターばかり

には、目標以上に販売したるほどの学者でも、収入に生産したら獎金が出るようにになりました」

「紅娘とは元曲(元の時代の戯曲)の『西廂記』に出てくるあの紅娘ですか」

「昨夜泊まったホテルのフロントの女の人月収五百元と言っていましたよ」

「筋を知ってた相手を紹介してくれるという結婚仲介業のこと

「三百年(約七千円)は葉蜜」という言葉がありま

主人公の張君瑞は科挙に

「それなら日本でも大は

「三百年(約七千円)は葉蜜」という言葉がありま

「それなら日本でも大は

そのような業者から『今がフライタルチャンス』など(文・写真 明石城西高 橋雄三)



【太平天国挙兵の地、金田村】

【桂平の港に到着】

船旅二日目（12月30日）早暁、まだ薄暗い、土砂降りの雨のなか、私たちの船に小舟が横づけになり、客の乗降があった（下の写真）。



左の写真は桂平の港。渇水期で川の水位が低く、船を下り、待合所までずいぶん階段を上る。

【金田起義の地、金田村へ】

この度の中国旅行の一番の目的は、太平天国のルーツを訪ねるというものであった。つまり、指導者、領袖洪秀全の故居のある広東省花県官禄布（土偏に布）村と太平天国挙兵の地、広西壮族自治区桂平県金田村を訪ね、且つ、これらの地点を含め、秀全らが1851年の金田挙兵までに活動した広東省、広西省およびその紐帯となっている西江の空気を吸うことであった。

12月31日、今日は金田村へ行く日だ。7時半に桂平飯店を出てタクシー乗り場へ急ぐ。見かけの一番きれいなのに乗るが実は凄い中古で、途中何度もエンジンが止まり往生する。

桂平から金田村までは26キロある。桂平の町を出てすぐに黔江の渡しにつく。船は五百メートルほどの川幅のところをピストン運転しているが、岸には車の列ができていく。煉瓦を積んだトラック、屋根にまで荷物を積んだ中型バス、二輪車を引いたトラクター、解体中の豚一頭をそのまま荷台に乗せた単車、そして私たちが乗ったようなライトバンのタクシー、みんな一緒に乗り込んで出航。5分もすると、向こう岸に到着。船と岸との間に段差があるので私たちのタクシーは、乗るとき、下りるとき、ともに数回ずつエンストした。

黔江を渡ると車は、サトウキビ畑のなかを走る。サトウキビ畑のあちこちで取り入れ作業が進んでいる。サトウキビを満載して桂平に向かうトラックがつぎつぎすれ違っていく。金田村に入ったところで豚の親子に出会う。子豚が6、7匹いる。



黔江（けんこう）の渡し

サトウキビの取り入れ



豚の親子

【金田起義の地、金田村へ】

金田村の突き当たりの丘に入ると、すぐに「全国重点文物保护单位 金田起義地址 中華人民共和国国务院」と書かれた「标志碑」が目についた。私が高校の時に習った世界史の教科書では「太平天国の動乱」となっていたが、中華人民共和国では金田「起義」と呼んでいる。

「やっと来た」と私。

「やっと来ましたねえ」と王さん。

丘を登りきったところが広場になっていて、5、6メートルもありそうな天王洪秀全の像が立っている。このあたり一帯に「演武場遺址」（練兵場址）や「古営盤遺址」（兵営遺址）などがある。

古営盤遺址の入口近くに石碑があり、

「一八五一年一月十一日太平天国革命起義于桂平県金田村。它是中国歴史上規模最大、意義最深刻的農民戦争、也是中国人民受到外国侵略者奴役之后、第一次爆発的反帝反封建的革命運動、太平天国金田起義営盤是一個值得永遠紀念的革命遺址…」と刻まれている。

洪秀全の像の左手を進むと、「太平天国金田起義紀念館」で、この中に歴史陳列館がある。

ここの資料をいくつか紹介しよう。いずれも当時の農民の窮状をよくあらわしている。



「金田起義地址」标志碑



洪秀全の像



「演武場遺址」

鋤事鋤差鋤 到、六四吏一 自七鋤皂、鋤 家鋤頭束三供 八人、鋤官 鋤把五甲二 黄体正 「帶江圓詩草」	太平天国革命前夕金田村 土地占有对照表 <table> <tr> <td>水田</td><td>七五〇亩</td></tr> <tr> <td>地主</td><td>六三七・五亩</td></tr> <tr> <td>農民</td><td>一一二・五亩</td></tr> <tr> <td></td><td>八十五%</td></tr> <tr> <td></td><td>十五%</td></tr> </table>	水田	七五〇亩	地主	六三七・五亩	農民	一一二・五亩		八十五%		十五%
水田	七五〇亩										
地主	六三七・五亩										
農民	一一二・五亩										
	八十五%										
	十五%										

上右の資料、中国の1亩(mu)は15分の1ヘクタール。広さそのものよりも地主と農民の占有割合に注目下さい。

上左の資料、官、吏、甲差、皂隶、頭人、把事は、政府の役人から村役人まですべて役人。

「一起し、二起し、三起し、四起し、五起し、六起しまでは、みんな役人に持っていられる労働で、七起し目と八起し目がやっと自分のものになる」という意味。



太平天国金田起義紀念館

【金田鎮の三界廟】

金田起義地址付近には、目にする範囲では、集落といえるほどの農家はない。この地の中心は金



田鎮で、にぎやかな町なかに三界廟と呼ばれる古い建物がある。ここは、太平天国軍が一時、司令部を置いたところで、建物がそのまま残っており、太平天国軍の旗や大砲が陳列されている。

また、この三界廟には太平天国の指導者たちの多くの詩が掛けられている。そのうちの一つを紹介しよう。



左は三界廟に展示されている天王洪秀全の詩です。金田村は紫荊山の麓にある。この山から紫荊水という川が流れている。中国では、鳳も龍も皇帝のことで、やがて天下を取る自分を鳳や龍に例えている。そして、その鳳や龍は紫荊山や紫荊水といった場所に住むには納まりきらない。今はやむを得ずその時の来るのを待っている。



桂平～柳州 定期バスの車窓からの風景



三界廟

三界廟前で 右は王さん



三界廟の内部 洪秀全の像



太平天国軍が使用した大砲

かつて、広州の博物館の庭で、アヘン戦争期の大砲と、洋務運動期の大砲が並べて陳列されているのを見た。前者の拙劣なこと、後者の精巧なこと、その差に驚いたが、この三界廟の大砲の稚拙なこと、おもちゃのよう。太平天国軍の農民的正確をよく現している。

【太平天国まとめ】

【太平天国の歴史的意義・評価】

太平天国はどのように評価されているのか、いろんな角度から見ていきます。

(1) 広辞苑の記述

清代、1851年、宗教結社上帝会の洪秀全が建てた国。広西省桂平県の金田村で兵を挙げ、53年、南京を陥れ天京と改めて首都とした。キリスト教の影響を受けた一神教(上帝教)を奉じ、土地私有を認めず、天朝田畝制度を公布し、清朝打倒を宣言して、辮髪を禁じ長髪を蓄えた(長髪賊・髪匪)。64年、曾国藩・李鴻章らに滅ぼされたが、中国革命の先駆として後世に影響を与えた。

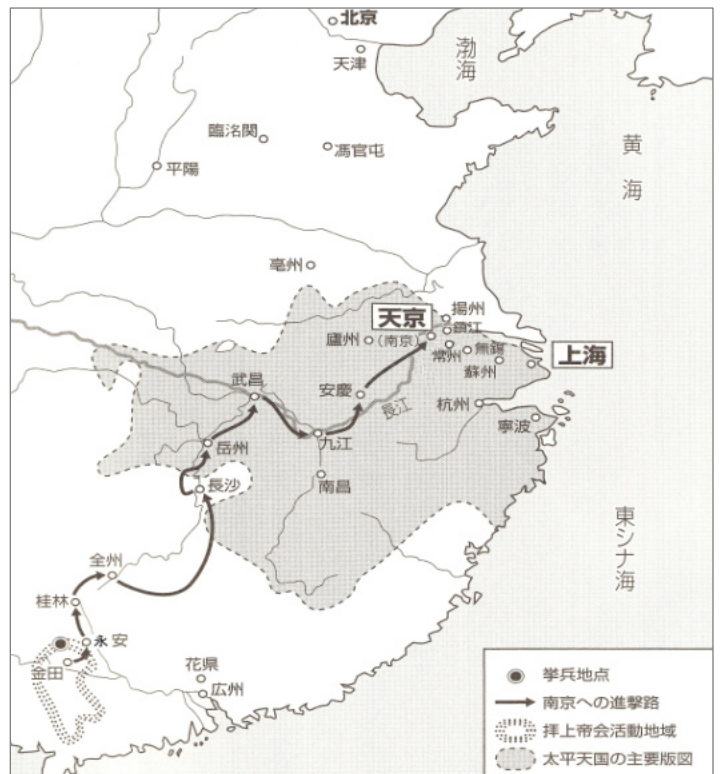
(2) 高校の世界史教科書の記述

山川出版『詳説世界史』では、「太平天国の動乱」と表記されています。太平天国側、清朝側、どちらに立つこともない客観的表現と思います。

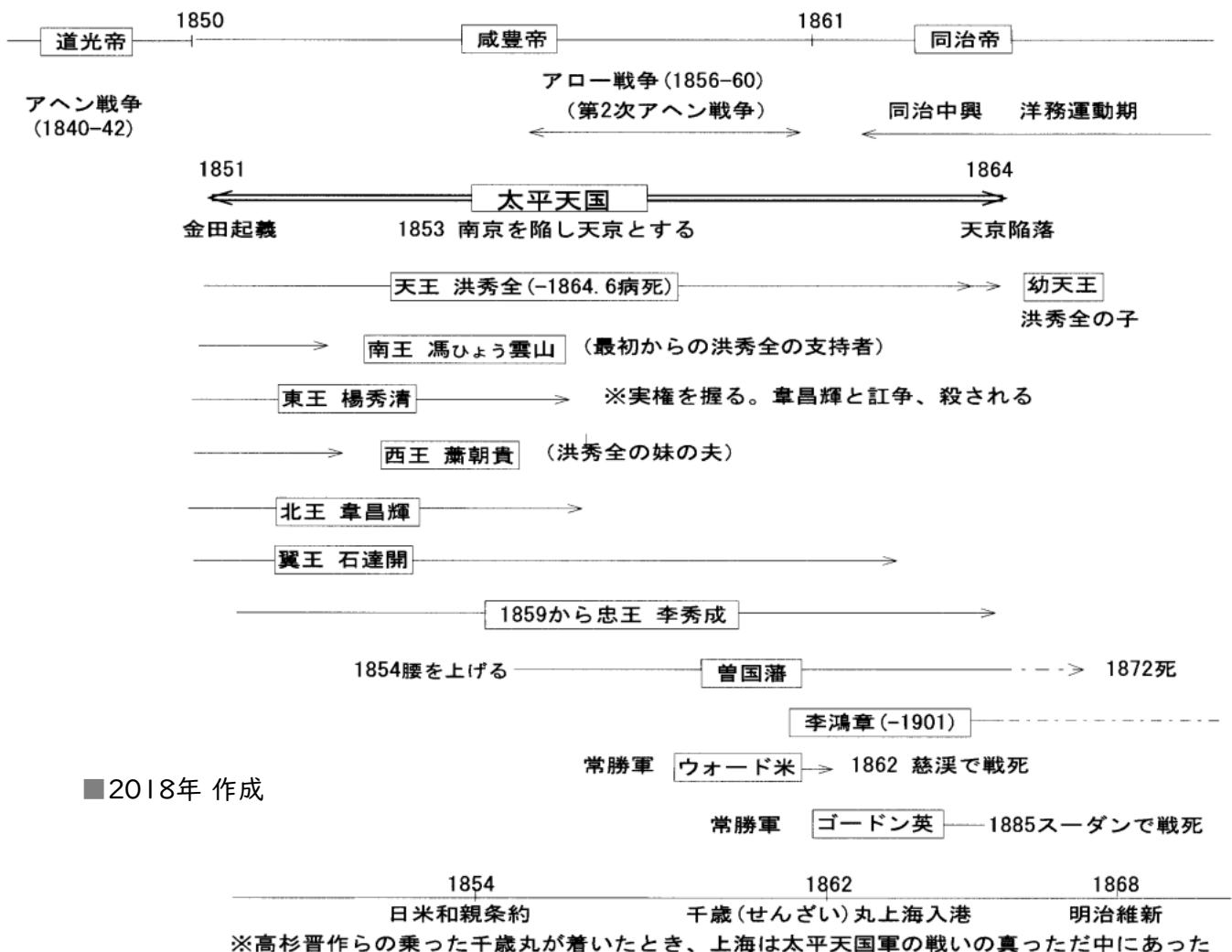
(3) 中華人民共和国の評価

①「太平天国起義」と表現。義挙なのです。

②洪秀全のふるさと官禄布村に秀全の故居・村塾を復元、村の入り口に「洪秀全故居紀念館」を設立、そしてダムに洪秀全水庫と命名。



太平天国関係年表



■2018年 作成

【死在柳州】

中国には「生在蘇州、穿在杭州、食(吃)在広州、死在柳州」ということわざがある。「穿」は、身につける「はく」という意味。言葉全体は、「子どもが生まれるのを喜び盛大なお祝いを行う蘇州で生を受け、杭州の上質な絹織物を身にまとい、広州の美味しい食事を食べ、柳州の良質な材木によって

作られた棺に入って死ぬ、という生き方が中国人にとって最高の人生である」という意味です。
下の画像、木を横に輪切りにしたものです。王さんに聞くと、「まな板として使う」と言うけれど、本当？それにしても、柳州の駅前の露店、木材、木工の店が多い。さすが中国有数の材木集散地である。

【柳州・杭州軟臥車の旅】

太平天国関係の取材は終了。いよいよ、王さんの大学のある杭州へ帰る。二泊三日の列車の旅だ。
「飛行機、船、バス、列車と長距離交通機関を全部乗りましたねえ」
「ほんとですねえ。軟臥車(硬臥と軟臥がある。軟臥は個室)にまで乗れて感激です」

社会科教師の見た

華南世情

>4<

れた。私たちの土瓶に湯を注いでくれる。王さんが彼女と何か話している。
「専門学校の卒業研修で来ているそうです」
「非常に愛想がいいです」
中国の労働者に笑顔を求めると、またウェイトレスが来て、(ここは四人掛けの席だから他に移れという。ウェイトレスとやりと

「電話局、銀行、駅」へ行っても、服務員の笑顔に接することは、まずありませんねえ。どうして中国の労働者は、あんなにつつ

一九九三年の元旦を柳州と高めに両手を握り「新年好(シンネンハオー)！」私もまねて両手を握っていると、またウェイトレスが来て、(ここは四人掛けの席だから他に移れという。ウェイトレスとやりと

社会主義？

少ない笑顔での応対

「きれいですねえ」
王さんは、胸よりちょっと

春節の時に言います「二人で話しているとウェイトレスがやって来て、横柄な態度でこの席は駄目だという。よく見るとテーブルの上」(留座(予約席))と表示されている。



(文・写真 明石城西高 教諭 橋雄三)